
恋愛観賞

はの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛観賞

【Nコード】

N7627C

【作者名】

はの

【あらすじ】

うちのクラスで付き合っているとあるカップル。その二人は何故かうちを巻き込んで事件を起こす…。事件を起こそうが喧嘩しようがラブラブだろうが、いい。けど…巻き込まれるうちが一番苦労してるってどうゆうこと！？この物語はこのカップルに巻き込まれたうちの話、このカップルの恋愛観賞をしよう。

第一話 研修

第一話、研修

『事実は小説よりも奇なり』

イギリスの詩人「パイロン」の「ドナージュアン」に出てくる言葉。

20年、生きてきたが、これほどこの言葉に共感したことはない。

この物語はノンフィクションである。

この物語はあるカップルの恋路である。

この物語は、そのカップルに振り回されるうちの話である。

始まりは専門学校1年の10月に起こった。

うち等のクラスは、研修合宿を控えていた。

研修、と言っても、クラスの親睦を深め楽しもうという合宿だ。

その合宿のメインイベント、持ち時間10分の小劇場だ。

クラスで四つの班に分かれ、シナリオも小道具も自分達で作って劇をやる。

優秀だった班にはちゃんと褒美もいただける。

その劇の練習を行なった放課後のことだった。

「ぐっさん？」

「うん！好きやねん…」

好き、と言った香奈ちゃんは少し照れていて可愛かった。

香奈ちゃんは、うちと一緒にの班になった女の子だ。

この班で女子はうちと香奈ちゃんだけ。

何故、二人しか女子いないのか。

それはこのクラスは四分の一しか女子がいなかったからだ。

このクラスはクリエイターコースと呼ばれ、将来、CGやゲームに

関連した会社を希望する学生が集まるクラスだ。
パソコン関係になると、男子の比率が自然と高くなる。

しかも、だ、このクラスはオタクばかりだ。

まともな人もいるが、正直、初めて教室を見たときうちは「生きていけへん」っと思った。

まあ：なればオタクの人としやべるのも楽しいが。
ちゃんと彼女がいる人だっている。

もちろん、オタクじゃない人もいる。

その中で人気は目立つのが、うちらが女子が【5人組】と呼んでる人たちだ。

カッコいいし、ファッションセンスもいいし、普通にモテそうな集団。

その【5人組】の中の一人がぐっさんだった…。

ぐっさんもうち等と同じ班だった。

うちは、一緒の班になって初めて顔と名前を一致させた。

だから、ぐっさん、と香奈ちゃんに言われても、どう返していいかわからなかった。

「うん、ぐっさんってわからんけど、応援すんで！」

「ありがとうはのちゃん！」

あの時はそう返事するしかなかった。

あの日以来、ぐっさんを観察するようになった。

普通に教室の端っこで寝てる。

うち等より二つ年上だった。

おもしろい。

その他もろもろ、あったが…正直、苦手だと思った。

どうして苦手か聞かれるとわからないが…。

嫌いなわけじゃない。

精神的に受け付けないわけでもない。

ただ…苦手だった…。

それがうちが持ったぐっさんの第一印象。

正直、この研修が終わればもう関することはなくなるのだろうと思っていた。

それが…こんな関係になろうとは…あの頃は考えもしなかった。

研修当日。

二泊三日の楽しい研修旅行のスタートだ。

行きのバスではカラオケで盛り上がった。

到着して、数時間後にもう小劇場の開始だ！

急いで準備して、そして始まった。

結果、見事うち等の班は準優勝を頂いた！

頑張った甲斐があったよ！

次の日、この日はウォーキングラリーをした。

班別で、田舎臭い道を歩いた。

歩き始め思った。

これは…上手くやれば香奈ちゃんとぐっさんが二人でしゃべれるチャンスじゃないか！？

思ったら即行動。

ぐっさんと仲のいい男子が前の方を歩いている。

ならぐっさんも前を歩くはず。

香奈ちゃんも前を歩いている。

これは大チャンスじゃないか！！

思わずニヤリと笑ってしまった。

もちろんうちは、後方を歩くことにした。

が……ここで思わぬ事態が発生した。

ぐっさんが、うちの隣りを歩いている。

そしてうちとしゃべっている。

あああああ！

お前は前を歩け前をおお！

しかもなんでうち！？苦手なんだってえええ！

内心そう叫んでいた。

結局、香奈ちゃんとぐっさんが二人でしゃべる機会を作れなかった。

次の日の朝。

香奈ちゃんと仲のいい紗希ちゃんから聞いた話だ。

香奈ちゃんは振られた。

旅行最後の晩、香奈ちゃんはぐっさんに告白した。

ぐっさんは：「俺は年上やし、」

そう言って、香奈ちゃんの頭を撫でたらしい。

これは、ぐっさんが香奈ちゃんを振った：ことになるのだろうか？

どうして、ぐっさんはこんな曖昧な返事をしたのだろう。

疑問を抱きつつも、研修旅行が終わり、香奈ちゃんの恋も終わった。

これが全ての始まり。

第一話 研修（後書き）

読んでくださってありがとうございます。付き合ってる方！これから付き合う方の参考になれば…そしてうちと同じ状況に置かれた方が共感してくれればいいなと思います！

第二話 予想外の展開

第二話、予想外の展開

研修が終わって、年が明けた五月。

うちこと”はの”は専門学校は二年生、来年には就職が決まる。

そんな、もうすぐ忙しくなるであろう時期に、香奈ちゃんとぐっさんの話が再び浮上した。

話を切り出したのは、専門学校始まってから、ずっと一緒に登校している紗希ちゃんだ。

「ぐっさんさ、香奈を中途半端な振り方したやん、だからまだ可能性はあると思わん？」

「せやけど…。」

あの”年上やから…”という台詞。

確かに…ちゃんとした振り方ではなかった。

けど、あれからもう半年以上経っている。

ぐっさんからその手の話がないってことは、もうこの話は終わっているはずだ。

けど、紗希ちゃんは香奈ちゃんとぐっさんをくつつけようとしている。

もちろん、これは香奈ちゃんのためだ。

一時思いが離れたが、最近香奈ちゃんはまたぐっさんを思っている

という。

その香奈ちゃんに協力したいのだろうが…紗希ちゃんの一番の目的は…。

「嫉妬する香奈ってすごく可愛い！」

紗希ちゃんはサディストだ！

別に、紗希ちゃんはぐっさんのこと好き、というわけではないが…。遅刻寸前の時は、うちが先に学校に来て、後から紗希ちゃんがくる。その日に限って、紗希ちゃんはぐっさんと教室に入ってきていたのだ。

ぐっさんは、偶然にもうちらと同じ電車に途中から乗る。

元々遅刻ギリギリで来るぐっさんと紗希ちゃんがばったり会うのだ。

その電車の中で、香奈ちゃんの話をしているらしい。

そして、一緒に登校。

その姿を見た香奈ちゃんが嫉妬する。

確かに、嫉妬する香奈ちゃんは可愛いけど…。

流石、Sの紗希ちゃん。

うちもこのSっ気に何度もやられている…。

まあ…自分が少しMだってこともあるからいいけど…。

そんな日が続いたある日…。

「ぐっさんがね、はのが一番色気あるって」

「ぐっさんは、はののこと気に入ってるらしいよ!」

突然だった、紗希ちゃんとぐっさんがうちの話をしたらしい。

「そ：そか、そういわれても、うちぐっさんってよくわからんし。

ちゃんとしやべったのって：研修の時だけ：。」

あのウォークラリーの時は、まともに、楽しくしゃべってた、必死だったけど。

それ以外は、覚えがない。

それなのに、そんな話題をいきなり出されて、うちはどう返したらいいのだろう。

だいたい：香奈ちゃんの話をしていたのでは？

この時、思ったことは：ぐっさんが紗希ちゃんに惚れるんじゃないかって：。

理由はわからないが、女の感というやつだ。

けど、このことはすぐ忘れた、そんなことないだろうと：。

5月末のある帰りの電車。

うちと紗希ちゃんは学校と家はかなり遠く離れている。

うちはクラスで最長の登校時間、1時間30分を記録している。

電車に乗り換え、あとは約50分座っていれば最寄り駅に着く。落ち着いて紗希ちゃんと腰を下ろして、数分たったときだった。

「ぐっさんと香奈：意外な展開になったよ！」

お！何か大きな変化があったようだ！

この話の数日、香奈ちゃんはこっそり、ぐっさんにメモを渡した。香奈ちゃんのメルアドが書いてあるメモだ。そこにちゃんとした返事が欲しいと：言ったそうだ。

ぐっさんから返事が来たんだ！

意外な展開：というフレーズが気になる。
まさか：本当に紗希ちゃんとぐっさんが：。
なわけないか！

「香奈ちゃんとぐっさん！晴れてカップルになったん！？」

紗希ちゃんがニヤリと笑った。

そして、紗希ちゃんが、携帯を取り出し、何か操作して画面を見せた。

見せてくれた画面は、受信メール。

画面一面ほとんど、ぐっさんの名前で埋め尽くされていた…。

うっそ~~~~ん!!!!!!

「ぐっさんが、香奈振った、うちのことが好きやってんて。それで数日前から付き合ってたねん。」

「まって!ぐっさんはいいとして!紗希ちゃんは別にぐっさんのこととお!」

「好きじゃないよ、けど、まあ付き合ってみようと思って」

ありえねええええ！

ぐっさんと紗希ちゃんが…ぐっさんと紗希ちゃんがあ！？

本当に信じられなかった。

香奈ちゃんは、ぐっさんと紗希ちゃんが付き合うことを知っているらしい…。

どうしてこんなことになった？

うちは、正直紗希ちゃんが信じられなかった。

香奈ちゃんは本気でぐっさんのこと好きで、必死だったに、それを知ってるのに紗希ちゃんが好きでもないぐっさんと付き合うの！？それじゃ香奈ちゃんはどうなるの！？

あの子は優しいから、きっと香奈ちゃんとぐっさんを応援するだろう。

でも、こんな状態で香奈ちゃんは、ぐっさんを諦めきれる？

香奈ちゃんのぐっさんへの思いは、どうしたらいいの？

ぐっさんも、紗希ちゃんが好きでわないことわかって、付き合うらしい。

なんなんだ…この関係は…。

どんなにうちが不振を抱いたところで、二人は付き合っている。

もう、見守るしか、うちには出来ることはなかった…。

あの当時は！

第二話 予想外の展開（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

次回もまだまだ続きますので！

シヨボーイ小説家ながら、宜しくおねがします！

第三話 架空彼氏

第三話、架空彼氏

六月下旬。

紗希ちゃんとぐっさんが付き合って1ヶ月たった。

正直、心配である。

喧嘩ばかりしているようだ。

毎朝、学校に通う電車で紗希ちゃんがぐっさんとの喧嘩の話をする。

一度、学校帰りに喧嘩を生で見た。

隣りに座る紗希ちゃんがメールでぐっさんと喧嘩したのだ。

その時の雰囲気の恐ろしいこと…ほんと怖かった…。

その喧嘩の原因はいろいろあるが、ぐっさんの片思いが一番なのだろう。

付き合ってるとはいえ、紗希ちゃんはぐっさんが好きなわけじゃない。

ぐっさんもそこは辛いのだろうと思う。

まあ、それでも続いているのだから、見守るしかない。

結局は、うちにとって二人の関係は”他人事”なのだから…。

そんな日々が続いていた、ある日。
香奈ちゃんが、うちに相談があると言って昼休み、一緒に専門学校の屋上に行った。

屋上の椅子に腰を下ろす。

香奈ちゃんが持っていたジュースの入った紙パックを持った手に力が入る。

直感した。

ぐっさんのことだ…。

「どうしたの香奈ちゃん？」

あえて気づかないフリをした、そのほうが香奈ちゃんも話しやすいだろう。

「はのちゃんさ、ぐっさんと紗希ちゃんが夜電話してることは知ってる？」

「うん、その時よく喧嘩してるみたいやけど…。」

実は、二人は付き合ってることはクラスには内緒にしているのだ。

この事実を知っているのは極数人だけ…。

紗希ちゃん曰く、クラスの人が自分との接し方とか見方が変わるのが嫌だ…だそうだ。

対して変わらないと思うのだが…紗希ちゃんが嫌だというのならうちだって言わない。

だから、ぐっさんと紗希ちゃんは放課後デートするか、夜電話するしかないのだ。

その電話の内容は：ほとんど喧嘩のようだが…。

「それがどないしたん？」

「実は：ぐっさんな、紗希ちゃんと電話終わった後、うちに電話してくんねん」

な：なんですとお！？

「どうゆうこと！？」

「恋の相談…。紗希ちゃんとの電話の内容とか相談してくんねん…。うちしか相談相手いないからって…。」

ちょっと待て！どうゆうことだぐっさん！！

一瞬で、腹が煮えくり返るかと思った…。

ぐっさん、あんたわかってんの？

香奈ちゃんはぐっさんのこと好きだったんだぞ！

今もまだ好きかも知れないんだぞ！

なんで相談相手が香奈ちゃんなんだよ！

ふっさけんな投げ飛ばすぞ！（…はのは元柔道部です）

そう思っている間にも、香奈ちゃんは話を続けた。

「でな、深夜で眠いのもあるし：辛いし：この前、夜携帯の電源切ってん。んで、次の朝、電源入れたらメールが来てて…」

香奈ちゃんは携帯を取り出し、画面を見せてくれた。

『彼氏でもできたか？電話して悪かった。俺をふっきたなら良かったな。』

はつきり覚えてないが、こんな感じの内容だった…。

「つまり、ぐっさんは香奈ちゃんに彼氏が出来たって勘違いしてるってこと？」

「うん、やから…このまま彼氏できたことにしようかなって…。」

つまり…架空彼氏を作る…ということだ。

それでもいいと思った。

とりあえず、ぐっさんがそれでもう香奈ちゃんに電話かけないのなら…。

それが一番いい。

「ええと思うで。」

そう返事した。

「相談相手がなくて、ぐっさん辛いかもしれんけど……」

香奈ちゃんが、そう思ってるだけで十分だよ。

その日の午後の授業中、紗希ちゃんともう一人女の子友達の涼子が

香奈ちゃんを囲んでいた。

その三人はかなり仲が良く、一緒に昼ごはんを食べている。

今日、うちと香奈ちゃんが二人で話していたのが気になったのだろう。

先ほど、紗希ちゃんに話の内容を聞かれたが、適当に流した。

紗希ちゃんにまで架空彼氏の話をしなくてもいいだろうと思ったのだ。

きゃっきゃという女の子独特の話し声が耳に入る。

「彼氏できたの!?!」

そのワードだけ耳に入ってきた。

その声は…紗希ちゃんのものだった…。

「そうなの、そのこと、はのちゃんに相談してたんだ。」

香奈ちゃん!?!? 紗希ちゃんにまで架空彼氏の話するの!?!?

そんな! 話ややこしくなるやん!

その日の帰り…。

「香奈に彼氏か…その相談やったんやろ?」

「ええ…まあ…。」

もう話に乗るしかない。

頭をフル回転させて紗希ちゃんの話にあわせる。

「でも、ぐっさんのこと振り切れてよかった…。」

紗希ちゃんの、言葉が胸をつく。

そうじゃないと言いたい。

この状況で、一番苦しんでいるのは香奈ちゃんだと。

せめて、紗希ちゃんとぐっさんがラブラブだったら、本当に香奈ちゃんは諦められただろう。

けど、あの二人は別れる別れないの話もするらしい。

それを聞いて、香奈ちゃんがぐっさんを諦めきれないわけがない。けど、ぐっさんに別れろと言えぬわけもない。

辛いよな…香奈ちゃん。

うちは、”他人事”かもしれん。

それでも、出来るだけ、香奈ちゃんを苦しみから救ってあげたいと思った。

それと、もう一つ思ったことがある。

結局、ぐっさんは相談相手がいなくなったわけだ。

これから先、また何かあったとき、ぐっさんが誰を相談相手に選ぶか、だ。

もう香奈ちゃんは無理だし、変にプライドの高いぐっさんが、同じクラスの男友達に彼女の相談が出来るとは思えない。

そこで、一人の人間が浮かび上がる。

紗希ちゃんとぐっさんが付き合っていると知っていて、ぐっさんが気に入っているらしく、紗希ちゃんの恋の相談相手。

うちは、ぐっさんは必ずいつかその女に相談するだろうと思っていた。

自分だった。

第四話『電話』

第四話『電話』

もうすぐ夏休みを控えていたある休日。

その日はすごく暑かったけど、眠気が襲ってきたので、昼寝をしていた。

が、携帯が震える。

メールが来た、渋々目を開け身体を起こし、メールを確認する。

それは、うちが書いているブログ宛に来たメールだった。

その宛名に、眠気がふっとんだ。

ぐっさんだ…。

「紗希のことで相談したい。メルアド教えてくれへんか？」

そんな内容だった。

やっぱり…来た…予想は的中。

香奈ちゃんに相談できなくなって、ついに自分に火の粉が回ってきた。

どうするか、メールと向き合い悩んだ。

ぐっさんが自分のことを気に入っているのは知っている。

たぶん、うちがここでぐっさんと連絡取れば、ややこしいことになるのは明確だった。

どうする…。

すると、また携帯が震える、またメールだ。

「嫌か？嫌やったらええよ」

……………どうして今そんな言葉をふっかけるんだ！

落ち着け自分、あわてるな、考えろ。

ぐっさんがどう思っようというじゃないか！

別に好きなわけじゃないし！うちもぐっさんに恋してるわけじゃない！

これはクラスメイトとして、恋愛相談に乗るだけ。
それから発展することはない。

一度読んで、うちはぐっさん宛てにメールアドレスを送った。

数分してメールが帰ってくる。
何度かメールを返し、夜電話することになった。

正座して、携帯と向き合う。
そろそろ約束の時間だ。

携帯が振るえ、「今から電話する」というメールが来る。
一度息を吐き出し、いいよ、とメールを返すと、すぐに携帯が震えた。

「…勝負だ！」

なんの勝負かわからんが叫んだ。
そして…通話ボタンを押す。

「も…もしもし？」

『もしもし？はのちゃん？』

イエッサー

『なんか…こうやって電話すんのへんな感じやな』

「せやね…教室でやって普段あんましゃべらんのに…」

だってうちが苦手だもん…。

話の内容は、もちろん紗希ちゃんの話もあったが、ほとんどうちの話やった。

”俺は、はののそうゆうところ好きや”とか”可愛いな”とか…。

”お前に癒されたくて電話した”とか…。

やっぱ電話するんじゃないかと深く後悔した。

ダメだ、うちは、”好きや”とか言われると、素直に嬉しいと思っ
てしまう。

冗談でも、軽い気持ちでも、好意を持ってくれてることがすごく嬉
しい。

調子に乗ってしまう…。

なあぐっさん、

「ぐっさん、そんなうちを惚れさせたいん？」

…………あああああああ！

無意識爆弾落下ああああ！

バカ！ほんとバカ！誰か訂正しれこれ！
うちは混乱に陥った。

そしてぐっさんが返してきた言葉は…。

『はのやって、そんな俺に優しくして、惚れさせたいん？』

ショックだった。

何故、その言葉にショックを受けたのかはわからない。

だからさ、うちは、ただあんたのクラスメイトとして…

紗希ちゃんの友達として、出来ることをやろうとしてるだけ。

優しくなんかじゃない、そんなこと言うな、気づけよ。

うちはこんなに焦って、困惑してるんだ。

「……うちは、ぐっさんのことは好きにはならん、絶対」

酷いこと言ったと、今でも少し後悔することがある。
けど、突き放さなきゃいけない。

分かってる、今ぐっさんが紗希ちゃんと上手く行かなくて辛いのに。
本当なら、冗談交じりで”好きになるか！”と返すほうが良かった。

『…せやな、お前は紗希の友達やもんな…』

そう、ぐっさんは真面目に返した。

これが最初の電話。

それから、夏休みに入るまでに二回ほど電話した。

電話するかすごい悩んだけど…人に甘いうちには断ることが出来なかった。

いろんな話をした、ぐっさんと紗希ちゃんのこと。

うち自身の恋愛話とか、うちをぐっさんがいじって楽しんだり。

それが悔しくてなんとか返そうとしたり…正直”楽しい”と思うこともあった。

けど、また”そんなのはちゃんが好きや”と言った。
その度に、どう返していいか分からなくて…。

頼むから、それ以上、言わないで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7627c/>

恋愛観賞

2010年10月20日12時26分発行